

粉体工学会の運営について考えてみた

Consideration on Management of the Society of Powder Technology, Japan

後藤 邦彰*

Kuniaki Gotoh



2023年度・2024年度の（一社）粉体工学会（以下本会）会長を仰せつかりました。最近企画委員として本会の諸行事の企画をお手伝いしてきたことから、本会の活動内容については理解しているつもりです。しかし、学会運営についてはあまり考えたことがありませんでした。この度、巻頭言執筆の依頼をいただきましたので、これを機に学会運営について考えてみました。

考えるにあたって本会の設立者である井伊谷鋼一先生のお考えを知りたいと思い、古い粉体工学会誌を引っ張り出してきました。探してみると、井伊谷先生が粉体工学会会長に就任された際に執筆された粉体工学会誌第15巻第1号の巻頭言「学会への名称変更に当って」に学会運営方針が「機会がある毎に各種会合で討議された結論に若干の私見を加えたビジョン」として記述されていました。その概要は以下のとおりです。

1. 本会の対象とする粉体は超微粒子から塊状物までを含み、その集合体である粉体層は当然ながら、流体中に分散したエアロゾルやスラリーなども主要な分野である。
2. 粉体工学も近年は理論解析的な検討が各方面でとりあげられておりますので、従来より高度な基礎研究を重点目標として充実させたい。
3. 一方では実用的あるいは現場の調査研究を進展させて、緊急課題である技術開発に役立つことも目的としたい。
4. 創立以来の伝統である気楽で親しみのある会の雰囲気は是非維持したいと思います。
5. 国際交流を一段と活発にしたい。

現状と比較すると、1の対象物と分野は現在も継承され、新たにバイオ粒子も対象となるなど広がってきています。2の理論解析的な検討は明らかに進んだとは言いがたいのですが、その解析の基盤となる基礎現象の解明は、測定機器の発達、普及により格段に進んでいると思います。5の国際交流についても、学会単位だけでなく、技

術者、研究者個人の単位でも、当会設立当時と比較するとかかなり活発になっていきますので、これらについては学会運営で特に注力をしなくても発展していくと考えています。

3について、井伊谷先生は「公開の場でのオーソドックスな産学協同を推進することは本会創設以来の方向でありますから、今度も益々この面での進展を期待しております。」とされています。この「公開の場での産学協同」は、産学の共同研究とかではなく、研究発表会などでの発表、議論を通して、情報交換、意見交換することを意味しています。本学会にはそのための場として春期と秋期の研究発表会など各種行事と部会、研究会、ワークショップが用意されています。そこでの産学協同を推進するには、その議論の場に多数、多分野の技術者・研究者の方にご参加いただくことが必要となります。しかし、本会設立時と比べると、昨今は多くの学協会が設立され、研究発表会、講演会も多数開催されています。学術誌も多数刊行され、インターネットで簡単に研究成果情報が得られますので、学会諸行事に参加していただくためには、その場に行かないと訊けない内容、すなわち、講演者と聴衆との活発な議論が重要だと考えています。議論が活発になるか否かはもちろん参加者に依存しますが、例えば、講演スケジュールの設定や座長による時間管理で“場の雰囲気”を作ることも重要だと思っています。この“雰囲気”は、井伊谷先生も4で気楽で親しみのある会の雰囲気の維持として重視されています。また、多くの学会や研究会が設立されたことにより、主な講演者である学の研究者は参加“しなければいけない”場がたくさんあります。井伊谷先生も熱意と実行力に期待されている若手の研究者・技術者は、特に、参加“しなければいけない”だけでなく、行事運営も“しなければいけない”状況にあるように思います。

これまで発展してきた粉体工学会が今後も持続可能な会であるためには、会員の皆様が、“メリットを感じて”行事や部会研究会等の運営にご協力いただければ、各行事が興味深く、役に立つ議論が聴ける、“参加したい”場となる必要があると思っています。具体的にどうするかはこれからですが、本会が持続可能な学会となるよう考えていきたいと思っています。ご協力をいただけますよう、お願いいたします。

〈著者紹介〉

1986年3月広島大学工学部第三類（化学系）卒業。1988年3月広島大学院工学研究科移動現象工学専攻博士前期課程修了。1989年4月京都大学工学部助手。1997年4月山口大学工学部助教授。2003年7月岡山大学工学部教授。改組により現在は岡山大学大学院自然科学研究科教授。

専門：付着の関与する粉体操作と操作性評価

* 連絡先 gotoh@okayama-u.ac.jp